

持続可能な開発目標としての教育の向上： 名古屋ESD世界会議に向けて — 持続可能な ライフスタイル実現のための意識変革型学習の推進

1 背景

愛知県名古屋市にて開催される「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」を2014年11月に控え、ESD達成の鍵となるメカニズムとしての教育を向上させるためのロードマップの提示を目指した。名古屋で開催されるユネスコ世界会議は、「国連・持続可能な開発のための教育の10年(UN Decade of Education for Sustainable Development : DESD, 2005年～2014年)」を締めくくる会議であり、同時に、新たに2つの国際プログラムの立ち上げを公表する場でもある。この2つの新規プログラムの一つである、ESDに関するグローバル・アクション・プログラム(Global Action Program:GAP)は、DESDを継承する取り組みとして名古屋会議において公式に開始される。もう一つのプログラムとして、持続可能な消費と生産に関する10年枠組みプログラムの一環として、持続可能なライフスタイルと教育(Sustainable Lifestyle and Education:SLE)プログラムが発足予定である。効果発現を可能にする枠組み、アプローチ、戦略が策定されれば、この2つの新規プログラムはポスト2015年開発アジェンダ及び持続可能な開発目標(SDGs)に十分に貢献することが可能と言える。

2 目的

教育アプローチの改善や持続可能なライフスタイルを可能にする環境作りを通じ、意識変革型学習、社会の変化、持続可能性への移行をいかにして推進できるかが話し合われた。さらに、質の高い教育、ESDによる学習の成果、地球市民としての責任・権利(グローバルシチズンシップ)、平和教育といった課題をESDに関するGAPの枠組みに統合する方策が、参加者や発表者によって議論された。パネルディスカッションでは、2つの新規プログラムがいかにして持続可能な開発課題に十分な貢献ができるかが話し合われた。本セッションの目的は、ESDに関するGAP及びSLEプログラムの進歩的な形成を後押しできるような意義ある調査成果及び提言を提示し、持続可能なライフスタイルを実現するための変革的なプロセスの実現につなげることであった。



3 スピーカーリスト

[モデレーター]

佐藤 真久 東京都市大学環境学部准教授

[開会挨拶]

豊住 朝子 国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) ESDプログラム次長

[キーノートスピーカー]

ダニーロ・パディラ 国連教育科学文化機関 (UNESCO) バンコクESDプログラムコーディネーター/リエゾンオフィサー

[スピーカー]

ポール・オフエイ・メヌ IGES 持続可能な社会のための政策統合領域研究員 /
IGESプログラム・マネージメント・オフィス プログラムオフィサー

アベル・バラサ・アティティ 国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) リサーチフェロー

永田 佳之 聖心女子大学教授 / ユネスコ本部 ESD モニタリング評価専門家会合委員

シェファード・ウレンジエ ウプサラ大学 持続可能な開発のための教育に関するスウェーデン国際センター (SWEDES) /
ESD シニアプログラムスペシャリスト

[討論者]

ロバート・J・ディッドハム IGESプログラム・マネージメント・オフィス能力開発・ナレッジマネジメント戦略
シニアコーディネーター / 上席研究員

4 主要メッセージ

- ユネスコ・バンコク事務所、UNU-IAS、ESDに関するスウェーデン国際センター (SWEDES) 及びIGESは、SDGsとポスト2015年開発アジェンダへの寄与を目的に、ESDに関するGAPの実施において協力関係を強化する。
- IGESは、質の高い教育が持続可能な開発を達成する上で極めて重要である点を強く支持する。質の高い教育を追求する上での焦点は、ESDの包括的・変革的な理解の上に形成されるESDに基づく学習成果の強化、及び学習者が万人のための持続可能性のある未来の実現に関する課題に取り組むための能力の向上に置かれる。
- ESDに関する地域拠点 (Regional Centres of Expertise on ESD: RCEs) は、ESDアジェンダに関わる多様な関係者の参画を促す行動を拡大し、ローカルレベルで持続可能な開発に関する課題に取り組むための持続的な解決策の迅速な発掘に注力する。
- 持続可能なライフスタイルのための意識変革型学習は、持続可能性のある未来を確保するには極めて重要である。特に、ESDを通じた変化の主体として若年層は重要であり、ポストDESJ期間の包括的アプローチでは、若年層、及び個人と社会をより近くに結びつけるような意識変革型学習に焦点を当てる必要がある。
- SWEDESは、教育と学習の再構築及び強化に向け取り組んでいる。これには、アフリカ・アジア地域におけるコミュニティ・オブ・プラクティスが含まれる。GAPは全組織的なアプローチの実現を目指しており、これにより、ファシリテーターの能力を高め、地域住民がコミュニティ主体のESDプログラムを開発できるようにすることを意図している。

5 発表サマリー

パディラ氏による基調講演では、ユネスコ・バンコク事務所が実施するESD関連の活動が紹介された。過去40年間、ユネスコは、持続可能な開発という考え方に関わる教育イニシアティブを提案してきた。パディラ氏は、様々な国々で実施されたDESDにおける取り組みの成果と経験に基づき、先進教育概念としてESDの重要性を強調した。先進教育概念としてのESDとは、教育の質を高め、ローカルレベルの教育改革・革新を推し進め、教育の全段階・全側面に関わる指導内容を充実させ、さらに学習形態の革新を効果的に推進するものである。ESDは、持続可能な開発に係る現実問題に対する人々の関心を集め、青少年や成人が持続可能なライフスタイルを実践するよう促す。パディラ氏は、本年11月のユネスコ世界会議においてDESDからの経験と教訓がまとめられ、ESDの歴史において地球規模で教育改革・教育革新が継承される大きな節目となることを期待していると述べた。さらに、ESDに関するGAPの実施における連携強化を提案した。連携強化は、SDGs及びポスト2015年ESDアジェンダへ寄与することが可能である。

メヌ氏は、質の高い教育に関する様々な側面をいかに向上させるかについて発表した。質の高い教育の強化は、持続可能な人間開発において中心的な役割を果たし、持続可能な開発に多大に貢献する。質の高い教育の改善のためには、ESDについて包括的に理解する必要があり、ESDに基づく学習成果枠組み(Learning Performance Framework:LPF)の強化に注力すべきとした。LPFは、既存及び将来のESD事例の評価に活用可能で、持続可能性関連のプロジェクトの実施において具体的な指針となり得る。さらに、質の高い教育は、ESDに関するGAP、SDGsの教育に関連する目標、ポスト2015年開発アジェンダの礎石となるべきであると述べた。強固なESDがいかに教育の質を改善し万人のための持続可能な未来の追求へと学習者を促すことができるかを示すロードマップとしてLPFを活用することで、持続可能な開発のための質の高い教育がより充実したものとなり得るとした。

アティティ氏はESDに関わる129のRCEの役割に注目した。ESDに関与するRCEは、様々な活動やプロジェクトを支えており、RCEが支援する活動やプロジェクトは、パートナーシップ(協働)関係、協調学習、ネットワーキング、システムズ思考、多様性及び柔軟性が持続可能性のあるコミュニティの育成に果たす役割、といった部分を推進するものである。RCEは、学校カリキュラム作りを指導し、革新的な教授法を採用し、学習者の技能や社会で役立つ能力を高め、持続可能性を高等教育に取り入れ、コミュニティの関与と協力を通じて生計手段を転換し、持続可能な地域の構築に貢献する。アティティ氏は、RCEがポスト2015年開発アジェンダを多様な関係者の関与による行動拡大の方策と捉え、これに献身的に関わった点を強調した。これにより、地域住民は前向きな変化を起こし、生活を改善させる力と主体性を備えている。

永田氏は、変化を起こすチェンジエージェントとしての若年層に重きを置きつつ、持続可能なライフスタイルを実現するための意識変革型学習の重要性について発言した。包括的であるか(Holistic)、主体性に基づくか(Ownership-based)、参加型か(Participatory)、能力を引き出すものか(Empowering)を評価項目とする「HOPE」の評価枠組みの考えを紹介した。「HOPE」の評価枠組みは、ユネスコ・アジア文化センターが開発した。永田氏は、東日本大震災後、同枠組みを用いたアプローチを若年層に対して実施した経験に触れ、この結果、ESDを通じ、若年層はチェンジエージェントとしての自らの役割を認識していたことが判明したと述べた。この他の経験も踏まえ、ポストDESDの包括的なアプローチは、若者及び個人と社会間の意識変革型学習に重きを置くことを提言した。

ウレンジェ氏は、持続可能なライフスタイルのための意識変革型学習の実施においてSWEDESDが取り組んだ課題や成功事例を発表した。SWEDESDは、革新的な方法を用い、教育と学習の再構築や強化に務めた。一例として、アフリカ地域及びアジア地域におけるコミュニティ・オブ・プラクティスが挙げられる。意識変革型学習は、将来の行動の指針となる重要なツールである。ESDに関するGAPに関わる取り組みとして、SWEDESDは、全組織的なアプローチの採用、ファシリテーターの能力強化、地域住民によるコミュニティ主体型のESDプログラムの開発の促進を目指していると述べた。

6 ディスカッションサマリー

パネルディスカッションでは、ディッドハム氏がモデレーターを務め、ESDに関するGAP及びSLEプログラムの構築に対する各発言者の提言を掘り下げた。パディラ氏は、質の高い教育、意識変革型学習、グローバル・シチズンシップに関連する「優良事例」が、ESDに関するGAPの枠組み強化につながると述べた。さらに、GAPは、あらゆる関係者の参加を促し、ユネスコが有するパートナーシップを含めることで、SDGsを後押しすることが可能と議論した。メヌ氏は、質の高い教育は、現在の教育目標を含めた様々な開発目標の達成を左右する最重要要素と考える立場を示し、質の高い教育にESDの見方を加えることで、戦略的な投資となり、持続可能な開発アジェンダ全体の達成において重要な役割を果たす可能性を強調した。RCEをESDにおけるユニークな協力モデル・学習モデルであると捉えた上で、RCEが国際レベル及びローカルレベルにおける持続可能性に関する問題に取り組むにはどうしたらよいかという質問に対し、アティティ氏は、RCEは、ローカルレベルの問題を国際レベルで共有し、国際レベルの問題に関連づける場であると回答した。ローカルレベルの問題と国際レベルの問題は関連するものが多く、一例として、グローバル・シチズンシップの兆候は既に地域のRCEに現れていると考えられる。また、ESDに関するGAPに組み込まれている持続可能な開発に向けた質の高い教育の達成に関し、これに寄与する新たな課題は何かという質問が出された。これに対し、永田氏は、目に見える成果を挙げるツールとしてHOPEの枠組みを推奨した。最後に、学習プロセスを可能にする鍵となる要素は何かという質問が挙げられ、ウレンジェ氏から、アプローチに基づく個人学習から相互協力に支えられる集団学習へとシフトする点が指摘された。集団学習へのシフトは、持続可能性を念頭に置き、持続可能なライフスタイルを目指す意識変革型学習の経験から、理論と実践の調和が極めて重要であるとした。一例として、啓発活動や関係者間の対話は全て、アイデアを実施に移すためには必要である。従って、個人学習及び社会的学習、言うなれば、自身と社会は、密接に結びついているとの考えが示された。